



19世紀半ばのイギリスにおける「お針子」の表象

平芳, 裕子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(1):75-83

(Issue Date)

2011-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003440>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003440>



19世紀半ばのイギリスにおける「お針子」の表象 Representation of the Seamstress in Mid-19th Century England

平 芳 裕 子*
Hiroko HIRAYOSHI*

要約：本論は、19世紀半ばのイギリス、とりわけ1840年代のロンドンを中心に様々なメディアに登場した「お針子」の表象について考察するものである。研究を通じて次のことが明らかとなった。まず雑誌においては、貧しいお針子が憔悴した姿で、時に骸骨姿に代えて描かれた。それらはファッションに興じる裕福な男女の図像と対比的に示されることによって、ますますその悲惨さが強調された。次に政府による児童雇用委員会の報告書においては、お針子の過酷な労働環境と低賃金、健康被害が明らかにされた。ところが絵画や小説を見ても、お針子がただ下層階級の携わる厳しい労働としてのみ描かれていたわけではないことが明らかとなる。レッドグレイヴを始めとするヴィクトリア朝時代の画家は、産業革命の進行する社会において「内なる家庭」に留まり「裁縫」に携わる「お針子」を主題として描いた。糸紡ぎや機織りが機械化された時代に、「裁縫」における「女性の仕事」としての側面が強調される。鑑賞者たちは、「お針子」の表象を別世界の出来事ではなく、同じ世界の現実の視覚化として強く意識することになった。こうしてそれまで「刺繍」に限定されていた「趣味」としての針仕事は、1850年代にミシンが登場すると「裁縫」にまで広げられてゆくことになったと考えられる。

1. はじめに一大西洋を渡るお針子像

19世紀アメリカにおいて絶大な人気を誇った雑誌がある。『ゴードィズ・レディズ・ブック』として知られるこの雑誌は、印刷技術の黎明期から女性に関わる様々なテーマを取り上げ、記録的な発行部数と出版期間を誇った。しかしこの雑誌の歴史的重要性は、単に女性総合誌の先駆として様々なジャンルの記事を掲載したことだけにあるのではない。同誌は、ヨーロッパの上流階級に憧れるアメリカの女性たちに向けて、「レディ」としての作法とともに「妻」として「母」としての役割を教示し、良き女性にふさわしい装いをファッション・プレートで提示した。すなわちファッション雑誌の登場以前のアメリカにおいて、「女性らしさ」のモデルを言説化・視覚化し、アメリカの女性たちに普及させる文化的装置の役割を果たしていたのである。筆者はこれまで1830年代におけるヨーロッパ・ファッションの受容や改変、1840年代のファッション・プレート推進によるアメリカ型ファッションの価値化について『ゴードィズ・レディズ・ブック』を詳細に分析し、家庭装飾とともにファッションを通して「自他を飾る行為」が女性の仕事として位置づけられる過程を論考にまとめ明らかにしてきた¹⁾。これら一連の研究の次なる段階として1840年代以降の『ゴードィズ・レディズ・ブック』の特性と当時のファッションのコンテク

スト化の関係について研究を進めるのであるが、そこでとりわけ注目したい現象が1840年代の『ゴードィズ・レディズ・ブック』には生起している。

それはこの雑誌の60年余りに及ぶ出版期間において、1840年代後半から「お針子」が様々な形で表象されるようになることだ。ところが1850年代半ば、お針子は突如として姿を消す。およそ10年の間だけ「お針子」が登場する現象が見られるのである²⁾。これは一体どういうことであろうか。この問題にアプローチするためには、1840年代においてお針子がどのようなものとして社会に存在していたのか、お針子をとりまく状況を明らかにする必要がある。しかし問題の考察にあたって、『ゴードィズ・レディズ・ブック』が出版されたアメリカを一旦離れ、当時のヨーロッパの動向を確認することから始めなければならない。なぜならアメリカにおける1840年代とは南北戦争の起こる20年前、いまだ発展途上にあり、搾取される労働者階級の暮らしぶりに対してヨーロッパほどの先鋭的な意識は見られない。さらに『ゴードィズ・レディズ・ブック』は先進国としてのヨーロッパの話題を積極的に紹介し、イギリスの雑誌からの転載や引用を頻繁に行っていたからだ。そこでアメリカにおけるお針子像の生成と消滅の歴史のプロセスを考察するための手がかりとして、まず『ゴードィズ・レディズ・ブック』がしばしば参照元としていたイギリスにおける「お針子」の表象に着目する。イギリスにおいてはアメリカよりも早く、1840

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2011年4月15日 受付)
(2011年4月16日 受理)

年代前半からすでにお針子が様々なメディアに登場するようになった。

本論は、19世紀ヴィクトリア朝時代のイギリス、とりわけ1840年代のロンドンを中心として、雑誌や絵画や小説などのメディアにおいてさかんに表象された「お針子」の表象を考察するものである³⁾。お針子はイギリスの多様なメディアにおいてどのように表象されたのか。またお針子はいかに社会問題として前景化したのか。そしてお針子の表象に与えられた文化的・社会的意味とは何だったのか。イギリスにおける様々な表象の考察を通じて、のちに大西洋を越えアメリカの女性誌において新たな意味を付与されてゆく「お針子」像の分析のための手がかりとする。

2. 雑誌における「お針子」－貧困と死のイメージ

19世紀半ばのイギリスにおいて、「お針子」はどのような姿で登場するのだろうか。本章では、1840年代のロンドンを中心とする雑誌において表象されたお針子像を検討する。そこでまず19世紀イギリスの風刺雑誌として有名な『パンチ』⁴⁾を見てみよう。

1844年の『パンチ』に、当時のイギリス社会に見られる典型的な人間像がイラストで掲載された⁵⁾。その一つに「お針子」と題されたイラストがある(図1)。描かれているのは、簡素なドレスにエプロンをつけたお針子であるが、彼女は針仕事をしているのではない。テーブルにうつ伏せるようにして手で顔を覆い隠している。テーブルや膝の上には縫いかけの服地が見えているが、どうやら疲労のあまりに手を留めているようだ。暗闇に沈み込むような女性のイラストに添えられた文章には「上流階級のご夫人はドレスを急いで作らせるよりもむしろ、パーティの招待をお断りするのです」とある。つらい仕事で憔悴するお針子の姿を掲載し、お針子たちに対する配慮の重要性を主張している。このように「悲惨なお針子」の姿を図像化し、読者に対してお針子への注意を促す記事を掲載したのは『パンチ』だけではなかった。1843年6月号の『イリュミネイテッド・マガジン』にも、お針子を主題とした記事が掲載された⁶⁾。数ページにわたる記事になかで特に目を引くのは、タイトルページに描かれたお針子のイラストである(図2)。戸口を暗示するかのような装飾品の前で、お針子は帽子箱を手をしている。おそらくは出来上がった商品を注文主に届ける場面が想定されているのであろう。お針子の表情は、帽子のつばに隠れてよく見えない。ところが驚いたことに、お針子の上半身は肋骨が露に、帽子箱に添えられた手も骨がむき出しになっている。注文品を仕上げるために、お針子がまさに骨身を削って働いたであろうことが、むき出しの骨と化した身体に表されている。記事は、自分の都合に合わせて次々と無理な要求をするのではなく、窮地にあるお針子の存在を無視してはならないと主張し、同時にお針子たちに対する政策の必要性を論じている⁷⁾。記事のタイトルに見える「死」の文字は、疲弊したお針子たちの未来を暗示しているようだ。そして、このような「死」のイメージを付与されたのは、ドレスを縫うお針子たちばかりではなかった。

再び『パンチ』を見てみよう。1848年には一枚のシャツの絵が掲載された。柄付きのシャツであるが、よく見るとその模様は骸骨と数字の反復であることがわかる(図3)。不穏な雰囲気は漂わ

せる骸骨は、お針子たちが骨身を削って縫い続け、今や瀕死ともいべき状態であること、そして数字は彼女たちがどれだけ働き続けようともたった2と二分の一シリングしか稼げないという社会的現実を示している。そして記事に添えられた文章は「シャツの歌」という詩を読者に思い起こさせている。この詩はそもそも1843年の『パンチ』12月号に掲載され、『タイムズ (The Times)』を始めとするイギリスの様々な新聞・雑誌に転載され、外国語にも翻訳され、広く普及したものである⁸⁾。『パンチ』自身の読者であれば、「お針子」という仕事の厳しさを唄ったこの詩の内容をすぐに思い出したとしても不思議ではない。詩の一節を見てみよう。

ああ！　かわいい姉妹をもつ方たち！

ああ！　母や妻のある方たち！

あなた方がボロにするのは肌着ではなく、

人という名の生き物です！

ひと針―ふた針―またひと針、

二重の糸で縫っているのは、

シャツであり、また同時に経かたびら⁹⁾。

休むことなく縫い続け、病に倒れんばかりのお針子。お針子は、食べてゆくために縫い続けるが、わずかばかりの賃金しか得られない。生活のための裁縫が、自らの命を消尽させてしまう。彼女たちが本当に作っているのは死に装束なのだ。お針子が命を削りながら縫っているシャツを、同じ人間がすり切れさせ使い古していく皮肉が歌われている。ところがお針子たちの深刻な事態に対して、詩の調子は軽妙であるがゆえに、ますます哀愁が漂う¹⁰⁾。

このように1840年代の雑誌において、女性用のドレスを縫い、紳士用のシャツを作る「お針子」たちが、時に憔悴した様子で、時に骸骨姿に変えられながらさかんに描かれた。なぜ、この時代に「お針子」が頻出したのだろうか。それには世界に先駆けて産業革命を迎えたイギリスという国の特殊事情が背景にある。前世紀からの商業革命のもと、紅茶や砂糖など多くの商品がすでに流通していたロンドンには、産業革命により多くの人口が流入し、ヨーロッパの一大消費都市として発展した。そしてイギリス国内において、ロンドンはとりわけ流行の中心地として機能することになる。産業革命による紡績機や織機などの発明が衣服生産の工業化をもたらしたことは周知の事実であるが、イギリス各地で大量に生産された綿布や毛織物などの生地は、ロンドンの流行に従い、最終的にロンドンで仕立てられたのである¹¹⁾。すでに18世紀末からロンドンでは『ラ・ベル・アサンプレ』¹²⁾や『レディズ・マガジン』¹³⁾といった雑誌が創刊されており、上流階級を対象とした最新流行のみならず舞踏会や演劇の開催情報も掲載され、社交情報が定期的に発信されていた。さらにはフランスと比べて身分制度に即した服飾規定がいち早く撤廃されたイギリスでは、経済的に成功した中流階級が上流階級のライフスタイルを模倣した¹⁴⁾。特に外見は、その人物の経済的・社会的地位を指し示す指標として重要な機能を担うことになる。ロンドンは、流行の衣服の生産と消費を兼ね備えたファッション都市として発展したのである。そのような都市と産業の発展を背景に、1840年代の雑誌には「お針子」がさかんに描写されるようになる。しかし「悲惨なお針子」

たちばかりではなく、雑誌は裕福な階級の読者たち自身の新しい慣習を戯画化した。

たとえば1844年の『パンチ』を見てみよう。「上流婦人 (lady of fashion)」と題されたイラストには、当時流行であった裾広がりドレスを身につけ、すました表情を浮かべた貴婦人が描かれている(図4)。記事は、女性たちが理想的なシルエットを得るために、幼いころからウエストをコルセットできつく締め上げなければならないことを指摘している¹⁵⁾。しかし「上流婦人」たる者、彼女が豪華なドレスでおしゃれを楽しむことができるのは、彼女たちのためにドレスを作るお針子がいるからだ。見開きの反対側のページには、先に見た「お針子」の姿が掲載されている(図1)。一方、流行を追いかめ、ファッションを楽しんでいたのは女性たちだけではないという点も留意しなければならない。同じく『パンチ』1846年に掲載された記事を見てみよう。“More Novelty in the Shirt Way”と題された記事のイラストに描かれているのは、大きな水玉柄のシャツを身に纏い、鏡の中の自分の姿にご満悦の男性である(図5)。男性の上方には、形は同じだが、人目を引く大きな柄の配されたシャツが4枚ほど描かれている。男性服は女性服と比べ曲線が少なく比較的単純なパターンからなっているため、既製服化がはやく進んだ。都市でまさしく「ホワイトカラー」としてシャツを着て働く男性が増加し、上昇志向の強い中流階級を中心に、多くの男性たちがシャツを身に纏った。ところがシャツの人気の高まり、市場にシャツが流通すればするほど、シャツの価格も引き下げられた。既製服店同士の価格競争に拍車がかかり、結果としてそれらを作るお針子たちの賃金が引き下げられたのである。イラストに描かれた華やかな柄のシャツも、そもそもはお針子たちが一針一針仕上げた商品である。1849年の『モーニング・クロニクル』には、安物既製服仕立店のためにチョッキやシャツ、ズボンを縫うお針子たちの哀れな証言が掲載されている。

どんな仕事をしていても、今私が作っているシャツを除けば、一週間で四シリング六ペンスから五シリング以上は稼げないのです。朝の八時から夜の十時まで座り続けていても。しかもその稼ぎのなかから、一シリング六ペンスを服の飾りに、六ペンスをロウソク代に毎週払わなくてはならないのですから、結局私の稼ぎは六日で三シリングです。でも、じっさいの収入はそれほどありません。だって仕立物をプレスするための燃料代も要って、それは週に九ペンスかかるでしょうから。半ハンドレッドウェイト(約25キロ)の石炭も要りますからね。すると、私の賞味の稼ぎは毎週二シリングとほんの少し、つまり、二シリング三ペンスから二シリング六ペンスです¹⁶⁾。

いまだミシンの発明以前の時代に、まさしく機械のように縫い続けるお針子たち。ところがどんなに働いたところで、生活するには全く不十分な賃金しか得ることが出来ない。そのようなお針子たちの壮絶な生活がここで吐露されている。

以上のように、1840年代の雑誌記事には「疲弊したお針子」たちとともに「おしゃれに興じる男女」が鮮やかな対称性をもって描かれた。1849年の『パンチ』に掲載されたジョン・リーチによ

る版画は、その最も効果的な事例と言えるであろう。身をやつした貧しいお針子の姿と、使用人に髪を結わせる裕福な女性の姿が見開きのページに対比的に描かれている(図6, 7)。ここには、当時のロンドンにおけるファッションに対する需要の高さと新しい産業が内包する社会的矛盾を見て取ることができる。人々を飾り、彼らの見せびらかしの欲を満たすために休むことなく働き続けるお針子は、時には疲れきった様子で描かれ、時には骸骨やむき出しの骨に代理されて描かれた。生きるために自らを犠牲にするお針子の労働には、「死」のイメージが寄り添っている。1840年代に頻発するこれらの記事は、ファッションがさかんになり「お針子」の存在が上流階級にとってますます重要になってきたばかりではなく、当時社会的にお針子の労働環境が注目を浴びるようになったことが背景にある。ここでお針子に政治的・社会的まなざしを向けさせる大きなきっかけとなったのが、政府による報告書である。ではそれはどのような報告であったのだろうか。

3. 「お針子」の実態はいかにして言説化されたか

これまで見てきたように、1840年代のイギリスにおいて「お針子」の図像や描写が多く登場した。「シャツの歌」を含め、雑誌に掲載された記事はヴィクトリア朝時代のお針子を取りまく貧困と死のイメージを普及させたが、彼女たちの苦境を解決すべき社会問題として広く世間に認知させたのは、政府による報告書の出版によるところが大きい。そこで次に報告書を通して、1840年代において社会現象となっていた貧しいお針子の姿を明らかにしたい。

「お針子」が、イギリス政府による報告書において初めて注目を浴びたのは、1843年に出版された第二次児童雇用委員会の報告書においてであった。産業革命により急速な工業化を背景として、委員会は労働環境の整備と改善を求める工場運動の調停に向けて組織された。政府は直接的にせよ間接的にせよ、法律を通して介入し、工場運動を取り締まる役割を果たしたのである¹⁷⁾。工場における下層階級の労働環境が社会問題として注目されるなか、とりわけ炭坑などで働く子どもたちの問題が浮上し、その実態を調査するために小委員会が組織された。1843年に出版された「第二次児童雇用委員会報告」は、子どもや青少年を対象とした調査報告書である¹⁸⁾。報告書は、イギリスの代表的な工業地帯における様々な製造業を取り上げ、子どもや青少年の年齢、見習い期間、仕事場の状態、労働・休息时间、事故の状況、賃金、健康状況などについての調査結果をまとめている。同報告書の大部分を占めるのは、パーミンガムやランカシャーをはじめとする大工業地帯の金属鋳業、ガラス工業、染色産業などを対象とした子どもの就労状況だ。ところが興味深いのは、これら工場生産による製造業の範疇には必ずしも当てはまらない仕事で、「その他様々な職種 (Miscellaneous Trades)」という項目のもとに記載されていることだ。そしてその筆頭に、帽子業やドレス業が項目として立てられ、帽子やドレスを縫う女性一すなわち「お針子」に関する記述がある¹⁹⁾。ここで、その報告内容から浮かび上がる1840年代初頭のロンドンにおけるお針子の様子について詳しく見てみよう。

報告書は、委員会のメンバーの一人R・D・グレインジャーによって行われた調査をまとめたものである。グレインジャーによ

ると、当時ロンドンで帽子店やドレス店を営む雇用主の数は少なくとも1500人、従業員数は店によって2、3人から25～35人までと幅があるが、平均すると10人程度であり、およそ1万5000人のお針子がいると見積もられる²⁰⁾。そして児童雇用委員会の関心は、お針子の多くに特に少女が含まれるという点にあった。報告では、女性が帽子作りを始めるのは一般的に14歳からとされ、2年の見習い期間を終了すると、より大きな流行品店で見習い職人として働き始めるという。そして就業時間に関しては、定時を設定している店であろうとも社交界シーズンは原則15時間、しかし急ぎの注文が入れば18時間まで延長されるとある。ほとんどの店では制限がない。24時間のうち、たった二時間の睡眠の時間さえとれないお針子もいるというのだ²¹⁾。

報告書はロンドンのお針子たちについて簡潔に説明した上で、具体的事例として雇用主、若いお針子たち、医師の立場の人々の証言を取り上げた。たとえば、帽子店やドレス店を経営する店主たちたとえばウェルベック通りのミス・オニールやデューク通りのマーフィー夫人などが口を揃えて言うには、ことに春の社交シーズンには、朝の6時から夜の12時、時には朝の4時から夜中3時4時までほとんど休みなく働き続けなければならない²²⁾。しかしロンドンにある店のほとんどが同じような状況であり、それがこの職業の基本であるという。雇用主の立場の女性に実名が記されているのに対して、お針子たちはその他大勢の匿名の存在である。あるお針子は「もし4時5時まで仕事をしても、いつものように8時には起きるのです。朝8時から1時2時3時4時5時、そして次の日の朝まで働くことが一週間のうちに頻繁にあります。特に舞踏会の前には一晩中働き続けなければなりません」と労働時間の長さを訴えている。またあるお針子は「仕事中に寝ようものなら、見張りに起こされてしまいます」と監視の厳しさを訴えている。しばしば気を失うお針子さえいる。「目眩がすると、顔を洗って目を覚まします」とあるお針子は述べる。食事の時間も量も満足には与えられはしないのだ。

このようにお針子自身の言葉が紹介されたあとで、医師の所見が述べられた。まずヴィクトリア女王お付きの内科医が、お針子たちの健康状態について全体的な所見を述べるには、狭い部屋ですし詰めになって、わずかな食事時間以外は朝から晩まで働き続けているのでは健康を全く損ねてしまうという。またハミルトン医師やホジキン医師は、お針子たちの多くが神経衰弱、食欲不振、肺の疾患、子宮の機能障害を患っていると言う。そして外科医のダルリンプル医師は、単なる炎症から失明のケースまで、お針子たちに多く見られる目の疾患について説明している。お針子自身が吐露するように、まさに「いつ死んだとしても不思議ではない」状態だ。「いかなる男性も、若くか弱い女性たちに課せられた労働に耐えることはできないでしょう」と述べるお針子もいる²³⁾。過酷な労働で疲弊し、病に侵されていくお針子たちの様子が、医師の見解を通して明らかとなる。

「児童雇用委員会報告書」は膨大な調査結果を200ページ以上に及び掲載し、19世紀前半のイギリスの下層階級について論じる様々な著作や論文の典拠となった²⁴⁾。そのなかで、帽子店やドレス店で働くお針子について言及された部分はわずか数ページに過ぎない。ところが報告書の登場以来、お針子に言及する新たな冊子や

書物、新聞の記事が頻繁に出現するようになる。例を見てみよう。同じ1843年には、単独でお針子をテーマとした小冊子が発行された。報告者はR・B・グリンドロッドであり、グレインジャーのお針子に関する報告事例を多数引用しながらも、ドレス職人、帽子職人、刺繍職人、既製服仕立職人、すなわち「針」を使い縫い物する職人を対象として、その窮乏生活、品行、健康状態を35ページにわたって詳しく報告している²⁵⁾。同冊子において特に注目されるのは、お針子の健康状況を示した図版が掲載されていることである²⁶⁾ (図8)。お針子は長時間椅子に腰掛け縫い物をする事により、前屈みで背中を曲げて座ったままとなる。姿勢の悪さの恒常化が、お針子の骨格にS字型の変形をもたらす。正常な背骨の状態と異常をきたした背骨の状態を描いたイラストが掲載され、両者が比較される。そしてこの変形に医学的根拠を与えているのが、グリンドロッド本人に宛てられたクレイ医師の手紙である。25年にわたりお針子の健康状況を注視してきたという医師によれば、600人の患者のうち150人は深刻な変形を、50人も何らかの変形をきたしている。さらに140人はひどい咳の症状があり、ほとんどが慢性疾患を持っている。40人は軽い咳、65人は何らか別の病を患っているという状況だ。

長い労働時間、わずかな食事、蝕まれる身体。お針子はそれでも縫い続ける。グレインジャーの報告書には「ロンドンのドレス職人の生活ほどひどい (slavery) ものはありません」というお針子の証言が記載されていたが、その言葉を引き継ぐかのように、グリンドロッドの小冊子は「針の奴隷 (The Slave of Needle)」とタイトルが付けられた。さらに翌年の1844年にも新たな書物が登場する。「帽子職人とドレス職人」と題するテーマが『女性の主張』と題する書物のなかに掲載された²⁷⁾。こちらはグレインジャーやグリンドロッドの報告を抜粋した比較的短い文章から成っており、新たに加えられた情報はほとんどない。しかしお針子の苦境に言及する書物がまた新たに出版された点は注目に値する。

以上のように、第二回児童雇用委員会の調査報告は、お針子の過酷な労働と悲惨な生活の実態を明らかにし、「貧者」としてのお針子の存在を社会的に認知させた。グレインジャーの報告を契機として、「お針子」の苦境が様々な出版物で繰り返し語られ、雑誌記事においてもしばしば引用された。だが、下層階級の生活の実態が公にされたという事実は、雑誌や報告書の読者である中流階級以上の人々にとって、別世界のことでしかない。ヴィクトリア朝時代の政治家として有名なベンジャミン・ディズレーリが小説の中に記したように、イギリスに存在する富者と貧者、すなわち「二つの国民の間には交流も共感もない」のだ²⁸⁾。ところが、当時の絵画や小説におけるお針子の表象を見てもみれば、お針子は「下層階級」のみが携わる仕事とは限らなかったことが明らかとなる。そしてお針子が雑誌を始めとして絵画や小説などの様々なメディアで取り上げられたという事実は、お針子が有するある特性もしくは社会的位置に関係しているといえる。このお針子の特殊な位置について踏み込むために、当時の絵画や小説におけるお針子の表象を次に確認しよう。

4. 「隣人たち」の表象—絵画におけるお針子

「お針子」をめぐる言説や表象は、グレインジャーによる報告の後明らかに増加した²⁹⁾。とはいえロンドンのお針子を最初に発見したのがグレインジャーであったわけではない。それまでの時代にも縫い物をする女性は存在したし、古来、多くの地域で女性は家族の衣服を生産する役割を担ってきた。しかし1840年代のロンドンにおけるファッションへの需要を満たしたのは、産業革命による布地生産の機械化と、ミシンの実用化以前における下層階級の女性たちによるお針子労働である。ところが当時の絵画や小説に描写されたお針子像を見るならば、そこにはまた別のまなざしが向けられていることがわかる。

1844年のロンドンのロイヤル・アカデミーに、その名も「お針子 (The Sempstress)」と題された作品が出品された (図9)。画家はヴィクトリア朝時代の代表的画家であるリチャード・レッドグレイヴである³⁰⁾。まずその作品を見てみよう。屋根裏部屋で縫い物をするお針子の姿が描かれている。とはいえお針子の手は膝の上で力なく止まっている。テーブル上の蠟燭が、お針子の額に寄る皺と充血して落込んだ目を煌煌と照らし出している。薄暗がりの屋根裏部屋にはあるのはわずかな家具と食器、それに裁縫道具だ。水盤はひび割れ、窓辺の植木も枝がむき出しになっている。ガラス越しに夜更けの白んだ空が見える。それもそのはず、壁に掛けられた時計の針は午前二時半を指している。疲れきって、針を持つ手は止まり、虚空を見やる。彼女はこれから一晩中、夜が明けるまで縫い物を続けるのだらう。お針子の思わしくない体調を物語っているのは、テーブルの脇におかれた薬瓶だ。消え入りそうな蠟燭、枯れてしまった植木と同じように、お針子の魂も今にも消尽するようだ。

この「お針子」像は、ヴィクトリア朝時代の貧しい階級の生活を描いた社会派リアリズムの代表的作品と目される。政府の報告書によりお針子たちの実態が明らかとなる一方で、レッドグレイヴは画題としていち早く「お針子」を選択した。とはいえ、レッドグレイヴ自身がお針子の苦境を実際に見知っていたわけではないとジュリア・トーマスは指摘している³¹⁾。アカデミーの展覧会カタログには作品のインスピレーション源ともなった「シャツの歌」が引用された。T・J・エデルスタインが論じるように、レッドグレイヴのみならずフッドも、既に存在していたイメージをヴィクトリア朝時代の大衆のもとにより明解な形として提示したと言える。けれども二人が描いたお針子の姿は全く同じわけではない。レッドグレイヴの「お針子」は、フッドの詩に唄われたように「疲れきって荒れた指先で、寝不足の赤いまぶたの一人の女」であり、「せっせと針を動かし針仕事」の手を止め放心している。しかし「女らしくないボロの身なり」というよりは簡素なドレス姿であり、部屋にある数少ない所持品も古びて壊れかけているものの、整頓されている。彼女は、窓がなく空気の澁んだ薄暗い部屋ですし詰めになって働くお針子というわけではない。

レッドグレイヴの絵画は、過酷な労働に耐え忍ぶお針子の孤独を描きながら、ヴィクトリア朝時代の衰退しつつある理想的女性像に対する郷愁を呼び起こす。ヴィクトリア朝時代の男女分離主義的価値観では、男性は外の険しい社会で働き、女性は内なる心

地よい家庭を守る。女性は「母」として子どもを育て、「妻」として夫を支え、「女主人」として家庭を切り盛りするのが役目とされた。そのような家庭観・女性観の支配的な社会において、女性が外の社会へ出て働くことは極めて困難であった。しかしながら、上流階級であろうとも財産権をもたない女性が父親や夫と死別することがあれば、働かざるを得ない状況に陥る可能性は十分にあった。当時の小説には、お針子に身を転じる女性たちの姿がしばしば描かれている。たとえばディケンズの小説『ニコラス・ニクルビー』には、父を亡くし職を求めるケイトという名の娘が登場する³²⁾。伯父の紹介により運良く職を得るが、それが「お針子」であると知るや彼女の頬は「悲嘆の跡」を残すことになる。また『イリュミネイテッド・マガジン』にも、父との死別によって「お針子」として働き始める二人の姉妹の物語が掲載されている³³⁾。気丈なヘンリエッタに対して、アニーは過酷な労働に耐えきれず、徐々に健康を害してついにはベッドに倒れ込む。これらの物語に描かれているのは、一家の大黒柱である父親の死去という不幸によって、ドレスを注文する側からドレスを仕立てる立場に転落した女性たちの姿である。しかしながらお針子がどれほど厳しくつらいものであろうとも、その仕事は「家庭教師」を除き、中流階級以上の女性たちが自らの体面を保ちながら働くことのできるほぼ唯一の仕事であった。なぜなら、お針子は内なる「家庭」を離れることなく従事することが可能な仕事であったからだ。工場、すなわち外の社会に存在する作業場で機械を操る若い女性たちが増加していく中で、「裁縫」はいまだ伝統的な男女の領分を逸脱しない仕事である。さらに、同じ衣服に関わる仕事の中でも「洗濯」などの肉体労働³⁴⁾とは異なり、「お針子」は淑女の趣味である「刺繍」と同じ針を用いる繊細な仕事であることによって、下層階級以外の女性も携わるにふさわしい仕事と見なされたのだ。

ここでレッドグレイヴの「お針子」を再び見てみよう。ファッションへの需要が高まる中、「お針子」はまさに機械のように働く。しかし1840年代にはまだミシンは実用化されていない。「ひと針、ひと針、またひと針」と縫い続けて、疲労のあまり放心状態の女性。彼女は生きるために自分の命を消耗させている。しかし「お針子」は、絶命寸前であろうとも「女性の砦」を出ようとはしない。ここに描かれているのは、工場や狭い作業部屋に集められて働かされる下層階級の者たちではない。「お針子」は全く別世界の存在ではなく、絵画や雑誌の読者の世界と隣接した存在なのである。お針子の絵画を目にした女性たちが、「明日は我が身」といった恐怖心を必ずしも抱いたわけではないにせよ、彼女たちが相手にしているお針子が、自分たちと同じ世界の住人であることが当時強く意識されるようになっただろう。レッドグレイヴの絵画は、残酷なまでの低賃金労働でありながら「内なる家庭」ととどまる「お針子」という存在を理想化し、崇敬の念さえ引き起こせるかのようだ。

以後、トマス・フッドの詩にインスピレーションを得、レッドグレイヴの絵画で用いられた構図や場面設定をプロトタイプとして、多くのお針子像が描かれるようになる。例えば1847年、ジョン・T・ピールはまさしく「シャツの歌」と題した作品を発表した³⁵⁾ (図10)。画面に描かれているのは、縫い物の途中で手を休め、虚空を見つめる女性の姿であり、レッドグレイヴと同じく屋根裏

部屋という場面設定が用いられているが、作品全体が醸し出す雰囲気は異なっている。手狭な部屋の片隅におかれたテーブルの前に女性は座っている。つぎはぎのテーブルクロスや穴のあいた床を見ると決して裕福とは言えないが、女性の表情は穏やかだ。女性はシャツを縫う手を休め、肘をつきながら、光の降り注ぐ先を見つめている。窓の外には明るい風景が広がっているのだろう。また、1850年代に入ると同じく「シャツの歌」のタイトルのもとに、アンナ・ブランデンが作品を発表した（図11）。この作品にも屋根裏部屋で作業の手を休めるお針子の姿が描かれている。しかし、お針子は疲労で我を忘れているわけではなく、両手を合わせて祈りを捧げているかのようだ。そして虚空を見つめるのではなく、窓の外に開かれた大きな空を見上げているのである。レッドグレイヴの「お針子」に絶望的な悲壮感が漂うのに対して、後に描かれるようになった「お針子」のまなざしは明るい室外に一縷の希望を求めているかのようである。

以上見てきたように、レッドグレイヴの「お針子」以降、「裁縫」をする女性が数多く描かれるようになった。ここで注目すべきは、歴史的には「裁縫」をする女性が18世紀以前にはそれほど多く描かれてきたわけではない、ということだ。もちろん、「布」や「糸」など衣服生産に関わる女性の姿は数多く描かれている。ヴェラスケスの「糸紡ぎの女たち、またはアラクネの寓話」（1657年頃）には、紡ぎ車を回す老婆が描かれているし、シャルダンの「働き者の母親」（1739—40年）にも刺繍をする母親が描かれている。また絵画だけではなく、ギリシャ神話にも「糸紡ぎ」や「機織り」をする女神が登場する。布地を織りながら戦場に赴いた夫の帰りを待つペネロペは、織物が出来上がらないことを理由にして次々現れる求婚者の申し出を断る。またヘラクレスは、あてやかな娼婦のいる道へ進むか、糸巻きを手にした淑女のいる道へ進むべきか、岐路に立ち思い悩んでいる。絵画や神話において、糸を紡ぎ布を織る女性は「貞淑な女性」を象徴するものとして解釈されてきた。ところが18世紀を境として「紡ぐ女」と「織る女」は、徐々に絵画から姿を消す。美術史的文脈におけるその理由は、芸術の階層分化と担い手の変化とともに、「紡ぎ」が「卑賤な技の象徴」として排除され「学芸」に取って代わられたからだと解釈される³⁶⁾。

しかし、産業革命による技術革新の影響を考慮しないわけにはいかない。ちょうど「紡ぐ女」が姿を消した時代、それは紡績機や力織機が発明され、糸や布地が工場の機械で大量に生産されるようになった時代でもあるからだ。技術革新により衣服制作のための「紡ぎ」や「織り」といった作業が次々と女性の手から離れてゆくなかで、針を用いて布地を縫う仕事は「女性に好ましい仕事」としての価値を高めたのだ。「裁縫」は新たな「女性性」の象徴として機能することとなる。レッドグレイヴをはじめとして1840年代から頻出する「お針子」を主題とした絵画には、急速に進展する工業化の時代において「女性性」の象徴としての「裁縫」を、「女性」につなぎ止めておこうとする社会的欲望を見出すことができる。

5. 結びにかえて

これまで、1840年代のイギリスにおける「お針子」をめぐる言説と図像について考察してきた。「お針子」が様々なメディアに頻出するようになったのは、実社会において貧しいお針子が急増したことと無関係ではない。とりわけその存在を社会的に認知させる契機となったのは、政府による委員会の報告であった。報告書は、お針子たちの証言から過酷な労働、低い賃金、健康の状態を明らかにし、「お針子」の窮状を解決すべき労働問題の一つとして提起した。しかしエデルスタインが言うように、驚くべきは下層、中流、上流を問わず、あらゆる階級の女性が「働いている」という事実そのものであったのだ³⁷⁾。それまでの堅固な階級社会における「作る人」と「着る人」の権力関係は崩壊し、「お針子」の身体はまさに「二つの国民」が出会う結節点となる。いかに低賃金労働であろうとも、「布地」や「針」が象徴する女性性ゆえに、「お針子」は上流階級の女性にも開かれた仕事であった。雑誌や絵画、小説を通して見てきたように、お針子の表象は下層階級の実態の視覚化であるよりむしろ、それを眼差す者と同じ世界の現実の視覚化であった。そして社会的な問題としてお針子の環境がクローズアップされることで、「裁縫」という仕事への関心が結果的に強まることになり、裁縫が持つ「女性の仕事」としての特性が強調されるようになった。

おそらくは、このような1840年代の社会的状況と頻発する表象の積み重ねによって、裁縫は「女性の仕事」として認知されるようになっていったのであろう。さらに、1850年代のミシンの登場によって、それまで刺繍に限定されていた「趣味」としての女性の仕事が、裁縫にまで広がっていく。その時お針子仕事は、「趣味」と「内職」が混在した「女性の仕事」となり、家庭に入ると同時に「死」や「貧困」のイメージもぬぐい去られるようになる。そして、雑誌から「お針子」の表象が消滅／減少するのに合わせて、裁縫用の型紙が登場してくるのである。しかしこの問題の詳細については改めて論じることにした。

（付記）本論は、平成22～24年度科学研究費補助金（若手研究B）研究題目「ファッション文化史から見る『お針子』の表象—19世紀アメリカを中心に」の研究成果の一部として公表するものである。

【参考図版】



図1 「お針子」（『パンチ』1844年）より



図2 『イリュミネイテッド・マガジン』(1843年6月号)より



図6 「小遣い稼ぎ」(左)

図7 「お針子の賃金」(右) (1849年の『パンチ』)より

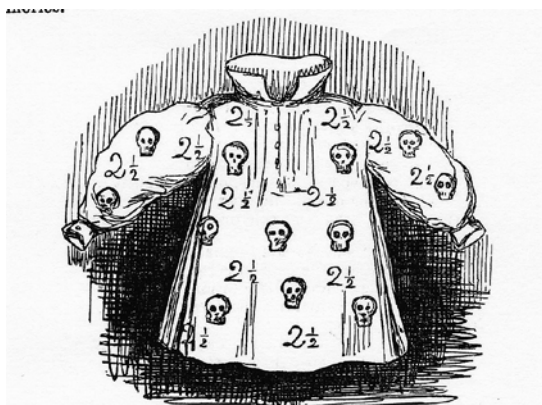


図3 『パンチ』(1848年)より

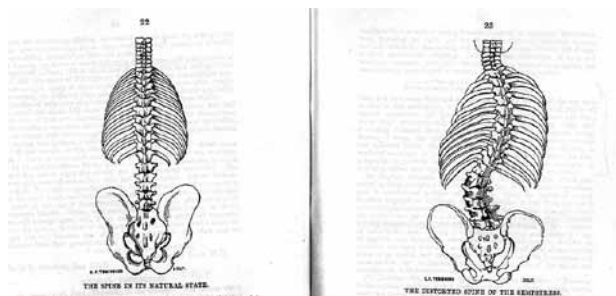


図8 正常な背骨と変形した背骨



図4 「上流婦人」(『パンチ』1844年)より



図5 『パンチ』(1846年)より



図9 「お針子」リチャード・レッドグレイヴ画 (1846年のヴァージョンによる)



図10 「シャツの歌」ジョン・T・ピール画 (1847年)



図11「シャツの歌」アンナ・ブランデン画（1854年）

注

- 1) 次の拙論を参照。「フィラデルフィア・ファッション—『レディズ・ブック』における良き女性の表象」『服飾美学』第47号、pp.55-72。「正統なるファッションとは—『ゴードイズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説—」『美学』第235号、pp.84-97.
- 2) 特に1847年から1853年にかけて出版された『ゴードイズ・レディズ・ブック』において、雑誌に付けられた版画、小説やコラムに添えられた版画のなかに、裁縫する女性の姿が描かれる。
- 3) 19世紀イギリスの「お針子」に関する主な先行研究には、イギリスの社会史的文脈をふまえ1840年代の「お針子」像の考察を行ったものに Beth Harris, “The Works of Women are Symbolical”: *The Victorian Seamstress in the 1840s*, The City University of New York, 1997、文学テキストや雑誌を対象とした「お針子」の象徴的イメージの考察を行ったものに Lynn M. Alexander, *Women, Work, and Representation*, Ohio: Ohio University Press, 2003などがある。本論文はこれらの研究を踏まえつつ、19世紀のイギリス文化研究の枠組みを超えてはこれまでほとんど注目されなかった「お針子」を、ファッション文化史の文脈において読み直す試みの一端を成しており、平成22-23年度科学研究費（若手研究B）研究題目「ファッション文化史から見る『お針子』の表象—19世紀アメリカを中心に」の研究の一部を成している。
- 4) *Punch, or the London Charivari*, London, 1841-1992.
- 5) 「中国におけるイギリス人展」（1844, vol.VI, pp.219-222）と題された記事によると、イギリスの典型的な人物像を紹介する展覧会が中国で行われた。記事はその報告を通して、当時のイギリス人の特徴と慣習を紹介している。
- 6) *The Illuminated Magazine*, 1843, Jun., p.97.
- 7) Ibid.
- 8) 作詞家は、戯曲家・編集者・版画家としても活躍したトマス・フッドである。トマス・フッドについては以下を参照。P. Casteras, “Weary Stitches”: Illustrations and Painting for Thomas Hood’s “Song of the Shird” and Other Poems, in *Famine and Fashion*, Beth Harris(ed.) Hampshire: Ashgate, 2005, pp.13-39.
- 9) “Punch,” 1843, vol.5, p.260. 邦訳は『「パンチ」素描集』松村昌家編、岩波書店、1994年、p.25による。
- 10) ここにはほとんど休むことなくシャツを縫い続け、憔悴しきったお針子の姿が歌われている。お針子のあまりにも惨めな境遇を歌ったこの歌の掲載に際して、作詞家であるフッド自身『パンチ』にふさわしいものかどうか戸惑いもあったというのが、フッドの心配をよそに、ヴィクトリア朝時代によく知られた歌となった。(Casuteras, “Weary Stitches,” p.19-20.)
- 11) 喜安朗・川北稔『大都会の誕生』有斐閣、1986年、pp.44-45.
- 12) *The Lady’s Magazine*, Wiltshire, UK: Adam Matthew, 1770-1832.
- 13) *La Belle Assemblée*, London: John Bell, 1806-1832.
- 14) 喜安・川北、前掲書、pp.45-46.
- 15) *Punch*, 1844, p.221-222.
- 16) ヘンリー・メイヒュー『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家・新野緑編訳、ミネルヴァ書房、2009年、pp.47-48. 店から直接仕事を請け負うための保証金が支払えない場合は、店からお針子に仕事を下請けに出す「ピン撥ね屋」のもとで働かなければならず、賃金はさらに低くなるという。
- 17) 児童雇用委員会の結成については以下を参照。Helen Rogers, “The Good Are Not Always Powerful, nor the Powerful Always Gook”: Politics of Women’s Needlework in Mid-Victorian London, *Victorian Studies*, Vol.40, No.4 (Summer, 1997), p. 594.
- 18) Children’s Employment Commission, *Second Report of the Commissioners, Trades and Manufactures*, London: William Clowes and Sons, 1843.
- 19) Ibid., p.114-122.
- 20) イギリスで最初の人口調査が行われたのは1801年であり、当時ヨーロッパ最大都市であったロンドンの人口は86万4000人であった。19世紀前半にロンドンの人口は倍増するが、1841年の国政調査ではお針子（帽子業・婦人服仕立）の数は約10万6千人であり、1851年ではお針子（帽子業・婦人服仕立・裁縫婦）の数は34万人と報告されている。1843年のグレインジャーの報告にある1万5000人という数字には、日雇いのお針子は含まれておらず、実際にはより多くのお針子の存在を想定する必要がある。国政調査については以下を参照。T. J. Edelstein, They Sang “The Song of the Shirt”: The Visual Iconology of the Seamstress,” *Victorian Studies*, Vol.23(Sept. 1957), pp.186. 角山栄・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』河出書房新社、1992年、p.108, 208.
- 21) Children’s Employment Commission, op.cit., p.116.
- 22) Ibid., p.115.
- 23) Ibid., p.116.
- 24) たとえばエンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』において、グレインジャーの報告を引用しながら、靴下編工やレース工などの工場労働者に言及している。（一條和生・杉山忠平訳、岩波書店、pp.63-70.）
- 25) Ralph Barnes Grindrod, *The Slave of the Needle*, 1844. (*Conditions of Work and Living: The Rcawakening of the English Conscience, Five Pamphles 1838-1844*, New York:

- Arno Press, 1972.)
- 26) Ibid., p.22-23.
- 27) *The Female's Advocate, Under the Superintendence of the London Female Mission, Vol. VII*, London: Houston and Stoneman, pp.121-127
- 28) Benjamin Disraeli, *Sybil or the Two Nations*, First Published 1845, England: Penguin Books, 1984, p.95.
- 29) Harris, op.cit, p.3.
- 30) 社会派リアリズムの画家として知られてきたレッドグレイヴの教育者・デザイナーとしての多岐にわたる仕事の再評価については以下を参照。Susan P. Casteras and Ronald Parkinson (eds.) *Richard Redgrave*, New Haven and London: Yale University Press, 1988.
- 31) Julia Thomas, *Victorian Narrative Painting*, London: Tate Publishing, 2000, p22-23.
- 32) チャールズ・ディケンズ『ニコラス・ニクルビー (上)』田辺洋子訳、こびあん書房、2001年、p.158-159.
- 33) *The Illuminated Magazine*, 1844, Mar., pp.279-285.
- 34) ヴィクトリア朝時代の洗濯婦については以下を参照。吉田恵子「ヴィクトリア朝時代におけるランドリー産業と既婚女性」『明治大学短期大学紀要』第47巻、pp.25-53.
- 35) ピールはアメリカでもしばしば作品展示を行い、アメリカにおけるお針子像の普及に大きな役割を果たしたと考えられる。(Casuteras, "Weary Stitches," p25.)
- 36) 若桑みどり『象徴としての女性性』筑摩書房、2000年、p.392.
- 37) Harris, op.cit, p.90.